デーリー東北新聞社提供

デーリー東北
2022年（令和4年）4月26日（火曜日）（19）

私見創見 Tuesday

2月掲載時に映画「男はつらいよ」の寅さんにあやかって口上（挨拶）を述べたところ、知人から「肝心の『人呼んで―』の後がない！」と言われた。ご指摘ごもっとも。言葉だけ江戸っ子のまねをして粋がってもダメですね。口上の続きは今後の宿題にさせてください。

さて、いわゆる江戸らしさを味わいたいときは時代小説に手が伸びる。特に岡本綺堂『半七捕物帳』が愛読書だ。光文社文庫の全集を手元に置くが、今は電子書籍で手軽に読める。難事件の探索に当たる岡っ引きの半七は和製シャーロック・ホームズと称され、その活躍が描かれる探偵小説としての面白さに加え、東京麹町育ちの生粋の江戸っ子である綺堂の妙筆で浮かび上がる、江戸から明治の風俗や言葉が非常に魅力的である。

「雷獣と蛇」という作品では、落雷時に雷獣が一緒に落ちてきて暴れ回る民間伝承を紹介。雷が鳴り出すと家じゅう総出で雨戸を閉め、蚊帳をつり、線香をともすというシーンがある。平岩弓枝『御宿かわせみ』の女主人公るいも大の雷嫌いで、雷が鳴り出すと蚊帳の中に逃げ込む場面がよく出てくる。

蚊帳に雷は落ちない。蚊帳自体が現代ではなじみが薄いため、知らない方も多いに違いない。薄い蚊帳に雷を防御する力はなさそうだが、素材の麻に秘密がある。蚊帳にまつわる民俗は、実は日本人と麻という植物との歴史の長さ、関係の深さを示す。

蚊帳の本来の用途は虫よけだ。夏に蚊などの虫の侵入を防ぐため、主に寝室にしつらえた帷（とばり）である。その使用は古代までさかのぼり、日本で本格的に作られ始めたのは奈良時代で絹製だった。室町時代に近江商人が初めて麻糸で作った蚊帳は、近年は合成繊維に代わり、アルミサッシやエアコンの普及まで夏の生活必需品だった（近江麻は今も有名）。蒸れない麻は日本の夏を涼やかに演出した。

ここでの麻は大麻（おおあさ・たいま）というアサ科アサ属の植物を指す。『広辞苑第七版』で「大麻」を調べると「麻の別称」とあり、「伊勢神宮および諸社から授与するお札」「幣（ぬさ）の尊敬語」といった一項が見つかる。

大麻と神道の組み合わせは意外な感じがするが、大麻の繊維である精麻は神道に欠かせない素材。神道では「オオヌサ」と呼ばれ、なでることが元々の清めの作法であったそうだ。ヌサは神様への供物を意味し、神に供えることで神体となり、おはらいの道具ともなった。神宮の祈禱（きとう）を執行するもので、神宮をも象徴するとされた。これらを踏まえると、大麻に宿る不思議な力に思い至る。大麻で作られた蚊帳の中の空間は、邪気を払う聖なる空間と考えられていたのだろう。なるほど雷（神鳴り）も近づけまい。

青森県の刺し子文化を調べ、南部菱刺しで用いられた布も大麻から作られたと知った。栃木県にある大麻博物館によれば、大麻は化学的に薬用型、中間型、繊維型に分けられ、かつて日本に生えていた大麻（繊維型）は日本人の衣食住を支える農作物で繊維素材の主役だった。特に寒冷な青森県は綿花栽培ができなかったため、大麻の布とのつながりは深く、大麻を大切にしてきた地域と言える。

1939年刊行の柳田国男『木綿以前の事』には、「木綿というものわが国における歴史は短い」「絹も決して働く人々の着物の材料とするには適さなかった」「では多くの日本人が何を着たかといえば麻であった」「麻は明治の初年まで広く植えられていた」と記されている。

庶民が着ている大麻の布は太くて重い頑丈なもので、これが「ヌノ」であった、ともある。木綿布はモメン、木綿糸はカナと呼んで区別していたようだ。それだけ大麻は日本人に非常に身近な存在だったのである。

大麻を栽培し、繊維をとり、糸にし、織り上げる技術が昔の農村地帯にはあった。南部地方でも「家で麻を育てて布を織っていた」と聞く。だが、48年施行の大麻取締法で栽培が禁じられ、その技術も地域から消滅した。衣生活文化は時代と共に移り変わる。現代では衣料の素材、植物繊維自体を意識することさえない。ましてやその意味を考えることなどない。

日本人に身近だった麻

移り変わる衣生活

川守田礼子
八戸工業大感性デザイン学部准教授

かわもりた・れいこ
1967年、旧福地村生まれ。東北大文学部卒。八戸工大二高を経て、2001年より八戸工業大で勤務。人形浄瑠璃文楽などの伝統芸能や染織に関わる伝統文化、特に南部菱（ひし）刺しが研究テーマ。第3回インテリジェント・コスモス東北文化奨励賞を受賞。文楽はちのへ塾主宰。

※この記事・写真等は、デーリー東北新聞社の承諾を得て転載しています。